「03年秋期日本語・日本事情プログラムおよびBCLプログラム」がスタート

▲ゆかたパーティでニッコリ

JSP受講者も参加

「2003年秋期日本語・日本事情プログラムおよびBCLプログラム」がスタートした。今回は10カ国35人の短期留学生が受講、そのうち日本のビジネス、カルチャー＆ヒストリー、日本語を学ぶBCL参加者は22人。留学生たちは約3カ月間の勉学・研修に励んでいる。

開講式オリエンテーションと歓迎会は9月17日、生田キャンパスで開催された。歓迎会では、本学学生のキャンパスアシスタントも加わり、留学生一人ひとりが自己紹介を行い、三曲研究会の演奏も披露されて歓談の輪が広がった。

ルーマニアから参加のオアナ・タルシニウさん（ブカレスト大学日本語・英語専攻）は「日本語は3年前から勉強していますが、このプログラムでペラペラと話せるようになるのが夢です」と抱負を話した。

なお、BCLプログラムには、このほどスタートした国際教育交流「ジャパン・スタディ・プログラム＝JSP」（注※）参加の3留学生（▽朱虹さん▽ルース・ディロンさん▽サラ・ジルさん＝いずれもダブリン大学トリニティ・カレッジ）も参加している。

朱さんは「中国からダブリン大に留学し、経営学を専攻。JSPプログラムでは日本語と『ビジネス』をしっかり学びたい」と話していた。

※国際教育交流「ジャパン・スタディ・プログラム」
＝国際交流協定校の学生が本学で日本語学習を進めると共に専攻科目を受講、同時に本学学生と教育交流を行う目的で一昨年から開始された（隔年実施）。期間は1年間。

【ニュース専修10月号3面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

03年度夏期留学プログラム体験記

今夏、海外5大学で行われた夏期留学プログラムに参加した2学生から体験記を送ってもらった。

「ミスは楽しむこと」と教えられ アメリカ・オレゴン大学 中村碧（経済3）

▲ホストマザーと一緒に（オレゴンのソルト・クリーク・フォールズで）

夏期留学プログラムに参加し、アメリカ・オレゴンのユージーンで1カ月間過ごしていました。

このプログラムを通して得たものは、数え切れないほどあります。オレゴンの豊かな自然に触れたことも印象深く胸に残っています。ホストマザーとブルーベリーを摘みに行ったこと。アメリカで一番深い湖の青さに息をのんだこと。高い岩からダイビングをしたこと。フェア（遊園地）でオニオンリングを注文したら、ただの大きなタマネギのフライが出てきたこと･･･。全てが新鮮で、毎日が驚きの連続でした。

語学能力に関しては、留学する以前より数段ブラッシュアップしたと確信しています。3日に1度くらいは自分の英語力のなさに落ち込むことがありましたが「ミスは楽しむこと」と先生から教えられ、頭で考えることをやめ、とにかく言葉を口にすることを心がけました。

先生をはじめホストファミリーやこの旅で出会ったたくさんの友情が、私にいろいろなことを教えてくれました。彼らは一様に自然に優しく、何よりも環境問題に対する意識が高く、驚かされました。彼らと出会えたことが一番の収穫だと思います。言葉が100%通じなくても一緒に大笑いすることは出来る、ということを再確認しました。日本人であるということを強く意識し、またそれを意識することが自信につながるということにも気づきました。語学研修という枠を超え、英語を学ぶこと以上に素晴らしい体験が出来たと思っています。

美しい自然、趣ある街並みに感動 マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク 大久保 渉（文2）

▲よく通ったケバブーの店の前で（中央が大久保さん）

私はこの夏休み、今年から新設されたドイツ語学施設での短期留学プログラムに参加しました。参加者は18人で、行き先はベルリンとライプチヒの間にあるヴィッテンベルクというところです。私たちはそこでそれぞれのホストファミリーのお世話になり、約3週間のホームステイ生活を送りました。

宗教改革のマルティン・ルターゆかりのヴィッテンデルクは、ルター・メモリアルがユネスコ世界文化遺産に登録されている、歴史ある街です。私たちが通った大学はその名もマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクで、美しい街並みの中にあり、建物自体がたいそう趣のあるものでした。

街の中心にある教会では、ミサやパイプオルガンの美しい演奏を聴くことが出来ました。街以外にもかわいらしい造りをした小学校、静かな湖、森や草原に広がる林道、果てしない地平線･･･。とにかくすべてが美しく素晴らしい眺めで、自然の景色に感動したことが、一番の思い出となりました。

私はこの留学中、多くの方々のお世話になりました。たくさんの厚意をいただき、楽しく毎日を過ごすことが出来ました。ホストファミリーはもちろんのこと、現地の学校の先生方や街の人、他からきた留学生、特に一緒に参加した専大生、引率の先生や職員の

方々には感謝しております。

海外でこんなに楽しい日々を過ごすことが出来て、本当に良かったと思います。

【ニュース専修10月号3面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

英語の学習10人10語 第5話 音読はどのアクセントで？ 島田孝右（商学部教授）

最近、音読の重要性が話題になっていますから、アクセント（なまり）について書いてみます。

英語のアクセントといってもさまざまです。ここではイギリス英語に限定します。イギリスは現在でも階級社会のなごりが英語に残っていて、上流、中流、労働者階級が各々異なる話し方をしますし、方言があります。アクセントのない人はほどんどいません。ある日本女性は「･･･ざーあますでしょ」などと気取りますが、イギリスでもこれに近いposh（上流階級のアクセント）な話し方があります。イギリス人ならそれを聞くとすぐわかります。貴族やパブリックスクール出身者にこれを使う人がいます、残念ながら（？）これを識別できたり、また使える日本人はまれです。

私は毎日音読の練習をします。ネイティブのスピードで読みますが、waterを「ワラ」と読むようなことはしません。イギリス人にはposhだねとよく皮肉を言われます。イギリス留学中に、ケンブリッジ大学出の弁護士さんと話す機会があり、ここはposhな英語でいくしかないと、気取って話しました。すると相手は、「どこで英語を学びましたか」と尋ね、私に負けまいとしてposh話し方をしたのです。失敗談もあります。ある会合で、銀行家の奥様とやはりposhな英語で話をした後で、同じ調子で受付の女性に話しかけたら、彼女は真っ赤になって怒りました。ばかにされたと思ったのでしょう。しまったと思いましたが、後の祭りでした。

品性のあるアクセントを学び、音読しましょう。しかし学生にはposhなのは滑稽ですから、ひどいアクセントのアナウンサーもいますが、BBCならまあOKでしょう。

【ニュース専修10月号3面】

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.